

応用生態工学会ニュースレター
Ecology and Civil Engineering Society (ECESJ)
2006年(平成18年)8月25日(金)発行

No.34

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-5 第7麹町ビル 25号室
TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: http://www.ecesj.com/
〔発行者〕 応用生態工学会(編集責任者:幹事長 江崎保男, 事務局長 島崎由美)

Contents

| | | |
|---|--------------|---|
| 1 | はじめに | 1 |
| 2 | 理事会報告 | 1 |
| 3 | 海外派遣報告 | 2 |
| 4 | 日韓合同セミナー参加報告 | 3 |
| 5 | これからの行事案内 | 5 |
| 6 | 本の紹介 | 5 |
| | <編集後記：事務局から> | 6 |

1 はじめに

- 10周年記念東京大会のプログラムを同封いたします。前回のニュースレターでの案内と若干時間配分が異なります。今後の発表タイトル、発表者の変更はホームページに掲載するプログラムおよび当日配布資料で対応いたします。参加申込書も同封いたしました。学会ホームページに大会参加申込用のフォームも用意してあります。できるだけフォームを利用していただけると助かります。
- メールアドレスについて再度のお知らせです。学会事務局で使用しているメールアドレスを新しく eces-manager@ecesj.com にして運用しております。また、編集事務局の投稿用アドレスも新しく ece-eda@ecesj.com といたしました。9月末を目処にこれまでの ocn の契約を終了したいと考えています。お使いのメールソフトに登録している学会事務局アドレスの変更をお願いいたします。

2 理事会報告

開催月日：2006年7月1日(土) 14:00~16:20
会場：応用生態工学会会議室別室(利根川歴史研究会事務所：千代田区麹町4丁目)
出席：山岸会長、谷田副会長、辻本副会長、荒井理事、大矢理事、角野理事、島谷理事、竹門理事、春田理事、古川理事、森下理事、江崎幹事長

委任状提出：近藤副会長

欠席：大村理事、沖野理事、鹿野理事、竹村理事、森理事、福岡理事

事務局：小川交流委員会委員、島崎(記録)

- 報告事項(一般経過報告、会員状況報告、平成17年度決算報告)を資料に基づき事務局から報告し、資料どおり承認された。
- 10周年記念大会の計画については、招待講演、基調講演の時間配分を原案より長くする事とし、その他は実行委員会の計画通り進めることとなった。
- そのほかの平成18年度事業計画については、九州地区事例発表会の開催方法、会員名簿作成について議論されたほかは、事務局資料どおり承認された。会員名簿は個人情報保護の観点から名簿の印刷・配布は行わず、事務局において会員情報を管理し、委員会活動などの必要に応じて事務局から最低限の情報を提供することとなった。また、ホームページにデータベースを連動させることによる情報提供の方法を、大会後に幹事会を中心に検討することになった。
- 平成18年度予算については、英文誌関連費を特別予算として切り離し、年間の収支の状況を明らかにするようにした。平成18年度においては予定購読者数に若干満たない分、ICLEE事務局維持費分と広告掲載による収入見込みを相殺し、27千円程度を一般会計から英文誌特別会計に支出することとした。また、一般会計についてはこれまで、前期繰越金等をすべて支出の予備費とし、予算収支を0としてきたが、単年度の予定を明らかにするため、具体的支出予定のみを予算化し、収支差額を次期繰り越し予定額として計上する。このことにより平成18年度の予算は100万円弱の支出超過の予定となるが、前期繰越金の一部を充てることとして、予算案が承認された。
- 国際交流海外派遣研究者については交流委員会の提案どおり承認され、3名にそれぞれ10万

円づつ助成することが決定された。

助成対象者と派遣先は以下の通り。

(1) (派遣先) 54th North American Benthological Society Annual Meeting 2006年6月4~9日 アメリカ合衆国・アンカレッジ

(派遣研究員) 根岸淳一郎

(2) (派遣先) International Conference on "River Hydroecology: Advances in Research and Applications" 2006年8月14~18日 スコットランド・スターリング

(派遣研究員) 中野大助・重松光太郎

〈事務局注: 残念ながら8月上旬に明らかになったロンドンでのテロ未遂事件により、派遣(2)の両名は参加を取りやめ、助成金が返還された。〉

- 普及委員会からは1)各地域の活動への学会としての協力、2)質問制度(相談窓口)の確立、3)継続教育制度の確立、4)学会宣伝ポスターの制作、5)普及、交流、パートナーシップ委員会の組織構成見直しが提案され、議論された。普及委員会あるいは幹事会で今後さらに検討することとなった。

3 海外派遣報告

54th North American Benthological Society Annual Meeting 参加報告

(独) 土木研究所自然共生研究センター
根岸淳一郎

このたび、応用生態工学会の2006年度国際交流海外会議へ派遣事業の助成を受け、54th North American Benthological Society Annual Meeting (以下 NABS) へ参加してまいりましたのでここに報告いたします。

NABSは淡水圏の基礎・応用研究に関する発表を対象に毎年北米各地で行われる学会であり、主に河川を対象とした名だたる研究者が集うこと、さらにそのフレンドリーな雰囲気でも広く知られています。今回は第52回を迎え、アラスカのアンカレッジで6月4日から6日までの会期で開催され、口頭・ポスター発表アブストラクト総数が750を数えるなど、盛大に行われた。

今大会は、通常行われるテーマ別セッション(例えば保全・再生生態学や群集生態学などを

対象)、に加え計16の特別テーマ別のセッションから成り立っており、セッション総数は127を数えました。開会時のキーノートスピーチは、政策、社会啓発、先住民族をキーワードにして計三名により行われ、自然環境保全を啓発し実現していくためには施策、行政構造の変革がよりいっそう必要になるというメッセージが多く含まれていました。これらは、その後続いた科学的研究セッションからの結果を、どう社会に結びつけ役立たせるかを再考させられる良い機会となりました。現在のNABSが対象にする研究分野におけるホットトピックを反映しているであろうということで、以下に特に発表数の多かった特別セッションの題名を紹介します。

1. Connecting small streams in time and space

2. Are tropical streams ecologically different?

3. Applications of genetics in freshwater ecology: gene flow, invasions, and conservation

4. Tribal bioassessment programs and biocriteria development

5. The 4th edition of Merritt and Cummins: another decade of change

6. Flow of resources to and from freshwater ecosystems

7. Long term data in benthology: applications to bioassessment and ecological research

8. Development of indicators that link nutrient enrichment to biological community response

9. Interactions between invertebrate drift and drift feeding fish

10. Watershed science in surface drinking water supplies

この中で、1と7は口頭発表総数がそれぞれ21と最多であり、最も盛況であった印象を受けました。私も含めたグループも発表を行ったテーマ1では、下流へのつながりを持った山地小河川の様々な現象をどのように時・空間的に結びつけて定量化し、概念化するかが多く議論されました。テーマ7では河・湖畔域と水域の物質循環に注目した研究が各地から報告される中

で、故中野繁氏のグループの研究成果が繰り返し紹介され、この分野に与えたその貢献度の大きさを実感することができました。私はNABSには三回目の参加であります。他国からの参加者との交流や発表を聞く中で、日本人による研究成果への評価・注目の高さが年々上昇していくのを強く感じています。このことは、中野繁氏のグループの研究が特に高い評価を受けていること、またそれに続く若手研究者方が積極的な研究発信へのたゆまぬ努力を行っていることの結果であるに違いありません。

末筆となりますが、本学会を通じて、国際学会への参加を支援してくださいました学会員の皆様方、および学会期間中にお世話になりました関係者の方に厚く御礼申し上げます。



氷河の前の研究者交流

4 日韓合同セミナー参加報告

溝口敦子 (名城大学)

片貝武史 (建設環境研究所)

知花武佳 (東京大学)

平成 18 年 7 月 17 日から 18 日にかけて、昨年の日本 (名古屋) での開催に続き今年で 4 回目となる日韓合同セミナーが韓国光州にて行われました。初日 17 日には、Honam University (Gwangsan Campus) にて「第 4 回河川環境の復元に関する日韓セミナー」が行われ、18 日には前日のセミナー参加者を中心に Gwangju 川の河川整備現場や Jangheung Dam 等のエクスクーション (現場視察会) が実施されました。

その概要について、以下にご報告いたします。

1) 第 4 回河川環境の復元に関する日韓セミナー

今回のセミナーは、日本側からの 15 名を含み 50 名以上の参加がありました。日韓の河川工学、

生態学、両分野から研究者および技術者らが一堂に会し、両国での河川生態に関する最新の研究成果や環境を意識した取り組み事例など多岐にわたる内容の発表が行われました。今回は、”Restoration of streams and wetlands in urban and suburban areas: How can we harmonize amenity enhancement along with ecosystem restoration? Principles and Case Studies” がテーマとして掲げられ、両国のプロジェクト報告や砂州が有する機能や湿地の生態系に関する研究発表など 12 件の口頭発表 (日韓各 6 件) と 11 件のポスター発表 (うち日本から 4 件) がありました。

セミナーの最後に行われた総合討論では、KICT の Woo 氏、辻本教授をはじめ、日韓の研究者 8 名がコーディネータとなり、本セミナーで提示された河川生態に関わる内容について活発な議論がなされました。この中で、辻本教授は、セミナーでの日韓双方からの発表を踏まえた上で、議論のポイントを以下の四つに集約し、これらについての議論、意見交換を行いました。

1. Philosophical shift
2. Knowledge lack on eco-system
3. Recognition of recent changes
4. Strategy for bio-diversity

その結果、河川管理において未だ顕著に見られる生態系に関する知識不足を、今後どのように解消していくべきか、近年の都市化や気候変動といった変化の認識や人とのかかわりの中で、自然との共生に関して、どのように考え、どのような方向性を示すべきか、について特に活発な議論がなされました。



ポスターセッションの様子 (提供：河内氏)



セミナー終了時の集合写真 (提供: Dr.Woo)

造工程について説明を受けました。



Gwangju-chen のシンボルとなる橋 (提供: 河内氏)

2) 現地視察会

セミナー開催期間、韓国では豪雨被害が多発しており、現地視察会の実施が危ぶまれました。しかし、幸い光州では豪雨となることなく、小雨の中、視察会が行われました。視察会には、前日のセミナー参加者のうち日本側 15 名を含む 30 名程度が参加しました。その行程は以下の通りです。

Gwangju-cheon Project Office → Gwangju-cheon
→ Jangheung Dam → Gangjin Museum

最初に訪れた Gwangju-chen は、Gwangju 市を流れる都市河川であり、市が中心となって整備や管理を進めています。見学では、工事事務所で事業内容の説明を受けた後、工事着工前の川をバス車中から視察しつつ、事業シンボルである橋の周辺で整備後の川の様子を見学しました。

この河川はこれまで深刻な災害が起こった経験も無く治水上の問題を抱えた河川ではないため、事業内容は都市河川として景観と親水性に配慮した整備や維持流量確保と水質改善に関する対策などが中心となっていました。事業説明や現場視察から、親水性を重視した”川づくり”をしているという印象を受けました。年間十数億円というお金を市が払うことで支川の一部に下水処理水を汲み上げ、上流から流すという対策を講じたり、シンボルとなる橋の付近では川の中にぼっ気目的ではない噴水を作ったりと、「人と川の関わり」に重きを置いた河川整備を実施しており、韓国の河川整備の実情を垣間見られたようにも思います。

次の Jangheung Dam では、ダムの概要説明を受けた後、ダムサイトとダム湖の上流端に造成された流入水の水質浄化のための Wetland を視察しました。

見学会の最後に Gangjin Museum に連れて行っていただき、伝統工芸である高麗青磁の歴史や製



Gwangju-chen の橋から上流を望む



生態池での見学の様子

3) 日韓セミナーを通じて

今回のセミナーは、日本でも大きな被害をもたらした梅雨前線による被害が韓国各地にももたらしている中の開催でした。しかし、幸いにも光州では豪雨に襲われることなく、河川環境に関わる研究者、技術者が持つ課題についての議論や意見交換がセミナー開催期間を通じて活発に行なわれた。また、意外な韓国の文化（特に食文化）にも触れることができるなど刺激的な内容となりました。これは、今回の主催者である Woo 氏、ホスト大学の Kim 先生など韓国側の関係者の準備・運営によるところが大きく、また、辻本先生、竹門先生、鎌田先生には日本側の調整等していただき、多くの関係者の協力によって成り立ったセミナーでありました。この場をかり、改めて感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

また、このセミナーを通じて築きあげられた友好関係と協力体制は、今後も活かされていくものと確信しています。

5 これからの行事案内

(1) 第5回北陸現地ワークショップ in 富山

日時：10月20日(金)～21日(土)

場所：富山市明治安田生命ホール他

北陸でのワークショップの開催も5回目になりました。本年は里地・里山を対象にそこでの自然環境の保全や再生、そのための技術をテーマに富山で開催します。

(2) 九州地区事例発表会

日時：11月17日(金) 10:00-17:00

場所：九州大学国際研究交流プラザ(西新プラザ)

「九州の応用生態工学の事例と研究」を気軽に発表、参加できる場として本年から企画されました。同封のチラシはまずは発表募集です。

(3) 第3回東北現地ワークショップ in 盛岡

日時：11月10日(金)～11日(土)

場所：岩手大学同窓会館(盛岡市)および胆沢ダム周辺

第3回目となる東北地域でのワークショップは東北地区における生物多様性の保全・再生の技術・手法をテーマに事例・研究発表が行われ、また岩手県胆沢ダムおよびいさわ南部地区圍場整備事業における環境保全対策を見学します。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

(4) 後援行事「第9回水源地生態研究セミナー：貯水池の生態学」

日時：9月28日(木) 13:15-17:30(予定)

場所：星陵会館(東京都千代田区永田町)

講演：〈特別講演〉クレメント トクナー博士

〈講演〉道奥康治(神戸大学)

〈講演〉大森浩二(愛媛大学)

〈講演〉森下郁子(社)淡水生物研究所

パネルディスカッション：

コーディネーター 山岸 哲

申し込み等詳細は財団法人ダム水源地環境整備センター研究第3部(03-3263-9945)へお問い合わせください。

(5) 情報サービス委員会提供 関連学会の情報

■ 2006年度 2006年度日本魚類学会年会の開催に伴う公開市民講座：干潟を守る～有明海をどう再

生させるか

1. 日時：2006年10月10日(火) 13時00分-17時00分

2. 場所：静岡県コンベンションアーツセンター「グランシップ」

3. 問い合わせ先等：小早川みどり

〒812-8560 福岡市中央区六本松 4-2-1

九州大学理学府生物科学専攻細胞機能学講座

TEL 092-726-4761;

mkobascb@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

URL: <http://www.fish-isj.jp/event/2006/sympo.html>

6 本の紹介

「ミジンコ先生の水環境ゼミ」

花里孝幸著、地人書館。定価2000円(税別)

ISBN4-8052-0772-8



著者の花里さんは、国立環境研究所(当時は国立公害研究所)、信州大学山地水環境教育研究センター(当時は理学部附属諏訪臨湖実験所)を通じて、ミジンコに魅せられて研究を続けてきた。公害研究所時代の生態毒性学から研究者生活をはじめたが、その時からつきあっているミジンコからの視座は、毒性学ではなくいまや生態学・環境科学一般に広がっている。やや身びいき?(あるいはミジンコびいき)にも思われるが、小さなミジンコが湖の生態系を操る生態過程が、いきいきと描かれている。本書は、財団法人リバーフロント整備センターの機関紙「FRONT」の連載記事「ミジンコ先生の水環境ゼミ」に加筆修正したものだが、3年間にわたって毎月の執筆を続けられたことに、まずは敬意を表す。花里さんの生物間相互作用を通じての群集理解のアイデアには、研究会や委員会ではいつも感銘を受けている。「環境問題の「常識」が常識でなくなる目からウロコの水環境学」という帯の解題は、まんざらウソではない。

魚がいい水環境のシンボルとされることが多いが、花里さんはこの迷信を断罪する。「水清ければ魚棲まず」というが、その逆も真である。富栄養湖では魚が多くなるのは、基礎資源であ

る植物プランクトンが多くなり、栄養段階ピラミッドの頂点に近い魚の量が増えるのであるから、けだし当然である。それだけでなく、フナやコイは水底をかき回して、水質を悪化させる。また、小さなミジンコが湖沼の生態系を支配するという。湖水の透明度や溶存酸素は植物プランクトンによって決まる部分が多いが、その量を規定するおもに動物プランクトン、とくにミジンコ類。ミジンコ-植物プランクトンの食物連鎖の基本骨格が湖の環境を支配する。湖に流れ込む清流が湖沼の富栄養化を招くという。流水環境では植物の異常繁殖を起こさない濃度の窒素やリンも、止水環境に入ると富栄養化、植物プランクトンの異常繁殖を引き起こす。いずれも当然のことだが、ややもすれば看過しがちだ。このような、「眼から鱗」の講義(ゼミ)が続く。水環境に興味のある工学者、水域の技術者には必読の書であると同時に、環境学や生物学の研究者や技術者にも勧めたい。イラストは生きものへの愛情にあふれ、簡明でわかりやすい。漫画家になることも夢見た花里さん自身の筆になるという。30編あまりのコラムとそのイラストも楽しい。 [谷田一三]

「につぼんだム物語」

豊田高司編、岡野眞久ほか著、山海堂。
定価 1905 円(税別) ISBN4-381-01819-2



21 世紀に入り世の中が大きく変化するなかで、ダム建設や管理も大きな転機を迎えています。この時期にこれまで長い期間にわたって建設・運用されてきたダムの役割を改めて振り返り、将来にわたって水を着実に利用できるように、ダムに対する

考え方を整理しておくことは大変重要なことと思われま。この調査はダムの建設や管理に携わる日本大ダム会議関係者により行われ、『ダムの役割』という報告書にまとめられました。本書は、その報告書をこれまでダムにあまりなじみのなかった方でも、手軽にお読みいただけるように書き直したものです。本書が、次世代を担う若い人々をはじめ多くの方々に読んでいただけることを心より願っています。(はじめ

により抜粋)

<<編集後記：事務局より>>

- 廣瀬利雄前会長から以下の資料を提供いただきました。資料について「はじめに」からの抜粋により紹介します。いろいろな方からのご意見をいただきたいとのことです。

「『生命の川』に触発され、『下流河川の生態系保全等に配慮したダムの流況管理(ダム操作)はどのようにあるべきか』について有志による懇談会を設け、『ダムによる流況管理の検討について』として取り纏めた。ここに纏めたものは、生態系保全に配慮した流況は如何にあるべきかとか、その流況にするためにダム操作をどうするかを言及したものではない。下流河川の生態系保全等に配慮したダムの流況管理のあり方の検討の進め方を提案したものである。(以下略)」

若干の余部がありますので、ご希望の方は
〒102-0083 千代田区麹町 4-5
第7 麹町ビル 226 号室
エコワイド研究所

あてに、送付先の住所・氏名を記して葉書にてお申込みください。

- 2004 年 4 月から事務局長を勤めさせていただいた島崎は 9 月末をもって交代いたします。後任は応用地質(株)から出向して下さる“奥村興平さん”です。引継ぎのための事項の整理ができず焦る毎日ですが、今年度の大会を無事終了できるようもう少し頑張ります。新事務局長共々、今後ともよろしく願いいたします。



釧路湿原の木道で出会ったエゾシマリス

[2006 年 8 月 25 日現在会員数]

| | |
|---------|----------------|
| 正(学生)会員 | 1,199 名 |
| 賛助会員 | 48 法人(71 口) |
| | 2006.8.25 1700 |